キリスト教者文学者と科学

Christianity and Scientific Thought among Japanese Christian Writers

TAMAKI Eri[*]

Abstract

Modernization of Japan in Meiji, Taisho and early Showa era proceeded by importing various social systems and thought from the West. This phenomenon also applied to development of modern Japanese literature. In the era of modernization, many famous Japanese literary figures had faith in Christianity or deeply involved with Christianity. In past days, there has been a number of research about the relationship between religious aspects of them and their works. However, there has been few research about the relationship of their works and Western scientific thought, which has formed the foundation of Western civilization with Christianity.

Therefore, this paper analyzes the perspective in Western scientific thought of these Japanese literary figures that deeply involved with Christianity. As a result, the research reveals that literary figures in Taisho and early Showa era gradually started to separate Christianity and scientific thought, which had been seen as inseparable in Meiji era.

Keywords : Doppo Kunikida, Takeo Arishima, Osamu Dazai, Christianity, Scientific Thought

บทคัดย่อ

นับตั้งแต่สมัยเมจิเป็นต้นมา "การเปลี่ยนเป็นยุคสมัยใหม่" ของญี่ปุ่น คือ การนำเอาระบบสังคม ตลอดจนแนวคิดจากชาติตะวันตกมาประยุกต์ใช้ กล่าวได้ว่าเป็นการพัฒนาสู่ "การเปลี่ยนเป็นชาติตะวันตก" นั่นเอง จากอิทธิพลดังกล่าว ทำให้การพัฒนาทั้งด้านวรรณกรรมญี่ปุ่น และความเป็นเอกลักษณ์ในแบบของตัวเองบรรลุผลสำเร็จได้ หลังจากยุคสมัยนี้ ในโลกวรรณกรรมญี่ปุ่น บรรดานักประพันธ์ที่ได้รับอิทธิพลอย่างมากจากสิ่งที่กล่าวมาข้างต้นนั้น

[*] Lecturer, Faculty of Humanities, Ramkhamhaeng University

มีผู้ที่มีความเชื่อในศาสนาคริสต์หรือมีความเกี่ยวข้องอย่างแน่นแฟ้นกับศาสนาคริสต์เป็นจำนวนมาก ดังนั้นจึงมีจำนวนงานวิจัยที่เกี่ยวข้องกับวรรณกรรมและความเชื่อบางประการของนักประพันธ์เหล่านั้นเขียนไว้มากมาย อย่างไรก็ตามยังไม่ค่อยพบงานวิจัยที่กล่าวถึงความสัมพันธ์ระหว่างแนวคิดทางวิทยาศาสตร์ที่เกิดขึ้นโดยมีรากฐานจากแนวคิดอารยธรรมตะวันตกพร้อมๆกับศาสนาคริสต์เท่าใดนัก

บทความวิจัยชิ้นนี้จึงมีจุดประสงค์เพื่อศึกษาวิเคราะห์ท่าทีของนักประพันธ์เหล่านั้นเกี่ยวกับแนวคิดวิทยาศาสตร์ โดยศึกษาจากงานเขียนที่แสดงให้เห็นถึงวิทยาศาสตร์ที่ปรากฏในวรรณกรรมของพวกเขา ซึ่งมีความสัมพันธ์กับศาสนาคริสต์ในช่วงยุคหลังสมัยเมจิ ผลการศึกษาพบว่า ความสัมพันธ์ระหว่างศาสนาคริสต์กับแนวคิดวิทยาศาสตร์เป็นสิ่งที่ไม่สามารถแบ่งแยกออกจากกันได้เมื่อญี่ปุ่นรับแนวคิดตะวันตกในช่วงสมัยเมจิ โดยความสัมพันธ์ดังกล่าวจะเริ่มปรากฏระยะห่างตั้งแต่สมัยทะอิโฌจนถึงต้นสมัยโฌวะ

คำสำคัญ : คุนิกิดะ ดปโปะ, อะริฌิมะ ทะเกะโอะ, ดะสะอิ โอะซะมุ, ศาสนาคริสต์, แนวคิดวิทยาศาสตร์

1. はじめに

幕末から明治にかけての近代化に際して、日本は西欧諸国に影響を受けながら法制、軍事など様々な社会制度を導入しつつ、近代国家の枠組みを築きあげていった。つまり、それは先行して近代化を達成した諸国の路線に目を配りながら、「西欧化」することで自らの近代化を進めるということにもつながった。

これに伴い、社会制度の近代化とともに思想面での「西欧化」の形も見られるようになった。これは福沢に見られるような、西欧社会制度の基盤となる価値観へ理解のための一時的な態度の場合もあれば[1]、自らをその価値観へと投入して理解しようとする姿勢としても現れた。後者の立場として、明治期以降、多く見られるようになったキリスト教者文学者を挙げることができるだろう（本文中では、洗礼を受けてキリスト教徒になった者とそうではない者とを同様に扱うため、彼らを一括して呼称するための言葉とし

[1] 福沢は相対的に学問、軍備が発展し、富国強兵が成立した西洋と対峙することに対して「我々日本国民も今より学問に志し気力を確かにして先ず一身の独立を謀り、随って一国の富強を致すことあらば何ぞ西洋人の力を恐るるに足らん」としたが、これは福沢が西欧思想の導入を一時的なものとしてみていたことの表れと言えるだろう。福沢諭吉「学問のすゝめ」『福沢諭吉選集』3 巻、岩波書店、1959 年、43 頁。

て、キリスト教徒ではなくキリスト教者文学者という表現を用いる)。この問題に対しては、個別文学者や時代区分、または文学サークルごとにこれまで数多くの研究がなされてきた。明治期の思想家、文学者が積極的にキリスト教に接し、これを通して西欧文明を理解しようとした例は枚挙にいとまがない[2]。

一方、西欧近代化のもう一つの側面である自然科学思想についても明治期以降の受容過程を知ることは重要である。つまり、自然科学思想は西欧においてはキリスト教が社会の価値観の前提であった時代を通して醸成されてきたものであり、本来両者は不可分ともいえる性質を持っていた。17 世紀以降、西欧諸国では現代の自然科学概念につながる数多くの理論が現れてくることとなるが、これは決してキリスト教的な価値観から独立して成立したものではなかった。ニュートンの力学や近代的天文学の発展の契機となったケプラーの理論のみならず、パスカルやガリレオなどのように、当時の時代背景の中では、汎神論または異端とされるような主張でありながらも、彼らの理論には科学的というよりも、むしろ神秘的とも言うべき概念が多く混在していた。さらに言うならば、ニュートンの理論自体も、神を念頭に置いた概念の上に議論を立てることによって初めてその運動力学も意味を持つのであり、全体の中の一部であるこうした自然科学的議論のみを独立させるということは、彼自身にとっては考えられないことだったのである。つまり、この時代以降、近現代の科学者（哲学者）は 17 世紀の理論の中から「科学的」な部分を抽出し、現代的な自然科学理論を構成したのであり、この時代における自然科学思想の「誕生」が、その時点で中世以前からの物の見方、あるいは自然の捉え方に劇的な転換を生じさせたのではないとも言える[3]。そこには、むしろ時間の流れ、あるいは政治や地域社会と宗教の関係などを係数としながらも、各地域が独自の時間と進度を持ちながら、自然科学の理論における神の位置づけに変化をもたらし、自然科学の聖性を俗性へと移行させる過程があった。

以上のような流れ、つまりこの聖から俗の流れを村上陽一郎は「聖俗革命」と呼び、これを 2 つの側面から考察している。一つは真理の担い手が教会権威などを中心とした一部の者のみに限られていた状況からの移行、真理の世俗化と「信仰からから理性へ」「教会から実験室へ」という啓蒙主義につながる流れであり、その延長線上にあるのは、あらゆる人間、民衆をも含んだ啓蒙概念への移行である。

---

[2] 例えば日本キリスト教文学会では機関誌『キリスト教文学研究』によって日本国内外の作家とキリスト教との関係が論じられ、毎年シンポジウムも開かれている。

[3] 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』（新版）新曜社、2002 年。

したがって、ヨーロッパにおける思想の展開は、科学思想の発展やキリスト教の世俗化をそれぞれ別のものとしてとらえるべきではなく、双方の関係性の変化においてとらえられるものであるといえるだろう。

しかし、そうした西欧思想の受容が行われた明治以降のキリスト教者文学者の研究において、彼らの科学思想に対する態度を説明した研究は多くはない[4]。そのため、本研究では明治以降のキリスト教と関係を持った作家であるキリスト教者文学者の作品中に表された科学についての記述をもとに、彼らがいかにそれを表現してきたかを考察することによって、日本におけるキリスト教者文学者の科学に対する態度の変遷を明らかにする。

2. 明治期、国木田独歩に見るキリスト教と科学

まず、国木田独歩の作品を見てみよう。彼は 10 代の頃より教会に通い始め、明治 24 年、21 歳の時に洗礼を受けている。佐古（1964 年）は独歩のキリスト教観について、彼の以下のような告白にその本質を見ている[5]。

「東京に於て、カーライルを夢み、ウオールヅウオースを夢み、バーンスを夢み、バイロンを夢み、今又西京に於て基督教信徒を夢まんとす」

つまり、独歩にとってキリスト教徒であるということは、バイロンを読み、ワーズワースを夢見るのと同じレベルでの彼の夢であったことである。そこには、キリスト教的な価値観に対してそれを逡巡する態度というものは、全くない。彼は、彼が夢見た西欧文明、西欧文学と同じ土台でキリスト教を理解し、それを受け入れるという態度をとったのである。このような彼に会って、西欧文明の思想的土壌である「科学」はどのように受け入れられたのであろうか。

『馬鈴薯と牛肉』[6]の中では、以下のような表現が見られる。

---

[4] 前述のキリスト教文文学会の機関誌においても科学と関連されて論じられているものはない。
[5] 佐古純一郎『近代日本文学とキリスト教』有信社、1964 年、122 頁。
[6] 国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』初出は明治 34 年（1901 年）。

「宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか、天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科学と哲学と宗教とはこれを研究し闡明し、そして安心立命の地をその上に置こうともがいている、僕も大哲学者になりたい、ダルウィン跣足というほどの大科学者になりたい。」

また『岡本の手帳』[7]には以下のような記述もある。

「わが願もまた、**科学者**として、哲学者として、宗教家としてこの不思議を闡明せんことにや。」

このように「不思議」を解明する者として科学者と宗教家と同列にとらえられ、さらにこの「科学」にもかなり肯定的な意見を持っていることがわかる。ただし、同書の別の個所に

「多くの**科学者**は不思議を感ぜずして「不思議」に弄ばるる愚者なり。」

という箇所が見られるように彼の知的良心は「科学者」なるものに全幅の信頼を置くプリミティヴなものではなく、あくまでも「不思議」の解明につながる「科学」それ自身に向いていることがわかる。

以上、国木田独歩に見られるように、この時期、科学思想に対する批判的、あるいは客観的な態度というものはあまり見られない。これは西欧思想と一体のものとしてバイ

---

[7] 『岡本の手帳』は、本文中において『牛肉と馬鈴薯』の主人公の手帳の抜粋であるという記述が見られるが、実際にこれが書かれたのは『牛肉と馬鈴薯』よりも早い明治 29 年（1896 年）であるという研究がある。佐藤勝「小説家の誕生　ー国木田独歩論の試みー」『東京女子大学比較文化研究所紀要 32』1972 年、6 頁。この年明治 29 年という年に関連して佐古（1964 年）が同年に書かれた『我が過去』がキリスト教を捨てた独歩が過去を振り返る記述であると見ているのに対し、笠井（1968 年）はキリスト教に対する彼自身の新たな態度の表明と見ている。後者の事情を考えれば『岡本の手紙』と『牛肉と馬鈴薯』の登場人物が同一人物であり、いまだにキリスト教的な価値観を強く残していた時期に先行して書かれた『岡本』の思想を後者の人物が共有していたと考えることが自然であろう。

ロンやワーズワースとともにキリスト教が無批判に受容されていたことや、当時の多くの文化人がキリスト教を受け入れたことと無関係ではないであろう。独歩においては西欧思想受容においてキリスト教、科学思想などは一体のもの、ある意味、不可分のものとして同時に受け入れられるものだったのである。

3. 大正期、有島武郎に見るキリスト教と科学

大正期に入ると、白樺派などの文学サークルにおいて多くの作家にキリスト教は受け入れられることとなるが、結局、有島武郎、志賀直哉など信仰から離れていくものも多かった。つまり、キリスト教は若い青年時代の作家にとって、自由主義や理想主義と結びつく一時的な思想的態度のよりどころであり、もはや明治期のような西洋の科学技術と一体として無条件に受容するべきものではなかった[8]。

こうしたことは、この時代の作品の中に対する否定的な態度が表れてくることからも理解できる。以下はキリスト教者文学者の一人であり、のちに信仰から離れていくという事実からも同時代の文学サークル的な態度一般を体現している有島武郎の一説である。

「それは**科学者**がその経験物を取り扱う態度を直ちに生命にあてはめようとする愚かな無駄な企てではないか。科学者と実験の間には明らかに主客の関係がある。然し私と私の個性の間には寸分の間隙も上下もあってはならぬ」[9]（傍線筆者）

明治期に国木田が疑いのまなざしを向けたのは科学者が、本来の科学的な態度（不思議を不思議と感じること）をとらなかったことに対してのみであったが、一方、大正期の有島においては、このように、すでに科学者が本来とるべき科学的態度（実証主義的な態度を生命に対しても用いようとすること）にも向けられているようになっていることがわかる。つまり、すでにこの時期、これまでのようなキリスト教と不可分な思想的土台としての科学思想という感覚は薄れ始め、キリスト教でさえ、自身の思想的立場をも

[8] 太田哲男「有島武郎とキリスト教」『国際レビュー』桜美林大学、第 20 号、2009 年、13-17
頁。

[9] 有島武郎『愛は惜しみなく奪う』叢文閣、初出は 1920 年（大正 9 年）。

とに取捨選択ができるものへと変わり、そのため科学的思想についてもある程度の客観的な態度をとることができるようになったといえるだろう。

4. 昭和初期、太宰治に見るキリスト教と科学

太宰治はキリスト教についてかなり造詣の深かった文学者である。彼は、彼自身の理解では、ヨーロッパの不勉強な学者よりもキリスト教や聖書をよく理解しているということを自認していた。昭和 16 年に新聞に寄稿されたエッセイには彼のキリスト教理解についての以下のような記述がみられる[10]。

「ヨーロッパの近代人が書いた「キリスト伝」を二、三冊読んでみて、あまり感服できなかった。キリストを知らないのである。聖書を深く読んでいないらしいのだ。これは意外であった。（中略）この程度の「キリスト伝」が、外国の知識人たちに尊敬を以て読まれているんなら、一般の聖書知識の水準も、たかが知れていると思った。」

このように太宰においてはキリスト教はもはや、外的な文明を受容するための土台ではなく、すでに自身のうちに内面化されていたといえるだろう。また、西洋思想一般についても以下のように続けいている。

「キリスト教の問題に限らず、このごろの日本人は、だんだん意気込んで来て、外国人の思想を、たいした事はないようだと、ひそひそ囁き交わすようになったのは、たいへん進歩である。日本は、いまに世界文化の中心になるかも知れぬ。冗談を言っているのではない。」

では、西洋思想を完全に客観視するようになった太宰は、作品中において科学をどのように語らせているのであろうか。以下は『人間失格』において登場人物の語りである。

---

[10] 「世界的」『太宰治全集 10』筑摩文庫、1989 年。初出は 1941 年（昭和 16 年）の早稲田大学新聞。

「これまでの自分の恐怖感は、春の風には百日咳の黴菌が何十万、銭湯には、目のつぶれる黴菌が何十万、床屋には禿頭病の黴菌が何十万（中略）謂わば「科学の迷信」におびやかされていたようなものなのでした。それは、たしかに何十万もの黴菌の浮び泳ぎうごめいているのは、「科学的」にも、正確な事でしょう。と同時に、その存在を完全に黙殺さえすれば、それは自分とみじんのつながりも無くなってたちまち消え失せる「科学の幽霊」に過ぎないのだという事をも、自分は知るようになったのです。」

ここでは、科学を事実としながらも、それに拘泥する態度が批判されている。つまり、これは自らの精神、思想を科学的事実から独立させることに対し、積極的な立場をとることを意味し、そこにはもはや自らの思想的立場を科学の中に位置づける可能性は完全に否定されている。さらに、以下では「科学」という言葉に対するより客観的で批判的な語りが見られる。

「お弁当箱に食べ残しのごはん三粒、千万人が一日に三粒ずつ食べ残しても既にそれは、米何俵をむだに捨てた事になる、とか、或いは、一日に鼻紙一枚の節約を千万人が行うならば、どれだけのパルプが浮くか、などという「科学的統計」に、自分は、どれだけおびやかされ、ごはんを一粒でも食べ残す度毎に、また鼻をかむ度毎に、山ほどの米、山ほどのパルプを空費するような錯覚に悩み、自分がいま重大な罪を犯しているみたいな暗い気持になったものですが、しかし、それこそ「科学の嘘」「統計の嘘」「数学の嘘」で（略）[11]」

すでにキリスト教を内面下していた太宰において、キリスト教と一体となって肯定的に受容されるべき科学思想という図式はもはや存在しない。彼の内において科学は完全に客観化され、キリスト教と同じ土台で受容するものではなくなっている。このことは、明治期においては文学者の中で受容されてきた科学思想およびキリスト教思想が大正期以降に互いに距離を持ち始め、太宰において両者の完全な分離という到達点に至ったことの表れであるといえるだろう。

5. 結論

[11] 太宰治『斜陽』初出は 1947 年（昭和 22 年）。

明治期の国木田独歩においてはキリスト教と科学思想は、西欧思想受容のため、ある意味、不可分のものとして同時に受け入れられるべきものであった。しかし、大正期以降の文学では、この不可分と考えられていたキリスト教と科学思想の関係に、距離が見られるようになった。そして昭和初期の太宰治において、両者は相互に全く依存しない独立なものとしてとらえられるまでに至ったのであった。

参考文献一覧 引用順

福沢諭吉「学問のすゝめ」『福沢諭吉選集』3 巻、岩波書店、1959 年

村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、2002 年

佐古純一郎『近代日本文学とキリスト教』有信堂、1964 年

福沢諭吉『福沢諭吉著作集』慶應義塾大学出版会、2002 年

国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』

国木田独歩『岡本の手紙』

佐藤勝「小説家の誕生　－国木田独歩論の試み－」『東京女子大学比較文化研究所紀要 32』1972 年

笠井秋生「国木田独歩とキリスト教」『山梨英和短期大学紀要』2、1968 年

太田哲男「有島武郎とキリスト教」『国際レビュー』桜美林大学、第 20 号、2009 年

有島武郎『愛は惜しみなく奪う』

太宰治『太宰治全集 10』筑摩文庫

太宰治『斜陽』